編集部=文
text by KOTONONE
山本尚明=写真
photograph by Naoki Yamamoto

「脱福祉」から「超福祉」へ 21

岩永敏朗さん（神奈川県横浜市）

NPO法人 五つのパン いのちの木

だれかの「弱さ」が、だれかの「仕事」になる。

カフェ「いのちの木」には、
いろんな人の「仕事」がある。
引きこもりがちだった青年は、
ハンドドリップでコーヒーを淹れる。
街のおばあちゃんたちは、
編み物のブランドをつくった。
脳性まひの若者が、地元の起業家と、
ソーシャルビジネスを立ち上げる。
みんなが「弱さ」を持っている。
その「弱さ」を持ちよると、
新しい仕事が生まれる。
それが地域を動かす力になる。
横浜に生まれた、新しい地域づくりの
「芽」を見に行った。

きれいに整備された並木の商店街の一角に「いのちの木」がある

ミシンの音とコーヒーの薫りと

「カランカラン」。扉を開けると、耳に入るのはミシンの音。その合間に、楽しげな笑い声が響く。

ここは、横浜市都筑区にある多世代交流カフェ「いのちの木」。NPO法人「五つのパン」が運営している。

店の奥では、一人の青年が、コーヒーを一杯一杯、丁寧にハンドドリップで淹れている。彼は、引きこもりがちだったというが、「働きだして、すでに五年となります」と、理事の岩永敏朗さん。この場所の生みの親だ。「いのちの木」は、障害者、主婦、高齢者など、さまざまな「生きづらさ」を抱える、しかし、福祉の制度に乗らない人たちの「仕事」の場になっている。

商社マン、福祉に飛び込む

岩永さんは、もともとは電子部品会社の営業だった。会社の業績も、岩永さんの成績もよかった。傍から見れば、順風満帆の人生。でも、上司に怒鳴られ、お客と飲みたくもない酒を飲み、カプセルホテルで朝を迎えては、「妻や子ども、大切なものをないがしろにして、自分は何をしているんだ」と虚しくなる日々だったと、本人は振り返る。

岩永さんが「港北ニュータウン聖書バプテスト教会」を訪ねたのは、そんなときだった。自分が持つ「弱さ」を受け入れてもらえたことで、安らげる場所があることを知った。「苦しいときは、聖書に書かれた言葉を噛みしめて乗り切りました」。同教会の牧師・鹿毛独歩（かげとくほ）さんに、何度も悩みを聞いてもらったという。その鹿毛さんは、「みんなが幸せになれる街づくり」を教会のミッションとして、絵本の読み聞かせなどの活動を通して、地域の子どもたちを支援してきた。岩永さんは三九歳で会社を辞め、鹿毛さんの想いに応え、福祉の世界に身を投じた。

「五つのパン」を立ち上げ、地域の精神障害者への支援をはじめる。まずホームヘルパー事業「クリスチャンワーカーステーション」を、ついで地域活動支援センター「マローンおばさんの部屋」を開所した。

地域に暮らすさまざまな立場の人を支援したいと、その活動の枠を広げるようになったきっかけは、二〇一一年の東日本大震災だった。

制度の枠を越えて誰もが交流できる場所

震災のあと、岩永さんは、地域で孤立している高齢者の現状を知る。当時の都筑区は、平均年齢四〇歳。しかし、転入者の約七〇%は、子どもを頼ってくる高齢者だった。「二〇二五年には、横浜市の人口の四人に一人が後期高齢者になる」と岩永さん。高齢化が地域の大きな課題になってしまう。

「地域には、いろんな人がいる。若者も、子どもも、高齢者も、障害者も。彼らは単に支援を受けるだけの存在

NPO法人「五つのパン」理事の岩永敏朗さん

ではない」。誰でも、誰かを支えることができるのではないか。「タテに支えるのではなく、ヨコにつなげるしくみが必要だと思いました」と岩永さん。

「マローンおばさんの部屋」は、福祉制度の枠の中で運営している施設。支援できるのは、障害者だけだ。ヨコにつなげるためには、制度の枠を越えた場所が必要だ。「教会では、赤ちゃんからお年寄りまでが、お互いに支え合っています。その考え方をそのまま地域に展開できないかと考えました」。「多世代交流カフェ」として、「いのちの木」の事業を横浜市に提案すると、「地域のセーフティネット推進モデル事業」に選ばれ、初年度の運営資金などの助成がおりた。

「いのちの木」では、カフェをベースに、さまざまな活動をしている。オープン当初は近隣住民を集めて裁縫ワークショップをした。後に、編み物や、本づくりのワークショップへと広げた。いずれも「ものづくり」をきっかけに、地域のさまざまな世代、立場の人が交流する場をつくることがねらいだ。

「ものづくりだけをする場所ではないんです。手を動かしながらだからこそ、できる話がある。日々の暮らしの『重荷』を降ろして、ゆっくりお茶を飲める場所が必要だと思います」。運営を担当している日向夏江さんは話してくれた。

おばあちゃんの編み物サークル

ある日、「いのちの木」へコーヒーを飲みに来た若い女性。つくりかけの編み物を手に、「この続きが編めないんです」とつぶやいた。すると、隣のおばあさんが「わたし、編めるわよ」と、続きを編み上げた。おばあさんが、困っている人を助けることができる。そんな気づきから、「いのちの木」の編み物サークルは、はじまった。

最初は趣味のサークルだったが、雑誌『JJ』のファッションエディター・楠佳英さんから、ブランドづくりに協力してほしいと声をかけられた。おばあちゃんたちの編んだ小物が、一点二万円弱で売れるようになった。趣味だった編み物が「仕事」になった。さらに二〇一五

編み物サークルのメンバー宮川昌子さん

一針一針丁寧に、しかし、要領よく編みあげていく

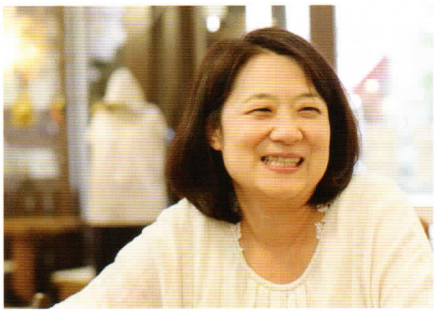
年、クラウドファンディングで資金を集め、オリジナルブランドも立ち上げた。

メンバーの一人、宮川昌子さんは、もともと群馬県で暮らしていた。夫を亡くし一人暮らしになってから、子どもが住む横浜で暮らそうと二〇一一年に仲町台に引っ越してきた。「一人で家にいるのが寂しくてね。行きつけのお店の人から、いいカフェがあるよって教えてもらったの」。それが「いのちの木」だった。集まる人と話をするうちに、いつの間にか、編み物サークルのメンバーになっていた。

「孫や近所の人に編んであげるのとは、全然違うの。やりがいがあるっていうか。不合格になると『なにくそ、次こそは』って、燃えちゃうのよね」と宮川さん。家で作業する人も多いが、宮川さんは「いのちの木」でコーヒーを飲みながら、仲間とおしゃべりしながら編むのが好き。「近所に住んでいる子どもたちも『お母さん、人生でいま、いちばん華やいでるね』って言うんですよ」と宮川さん。「いまのわたしに『終活』は無縁ね」と笑う。

見えない障害に苦しめられて

脳性まひがある大出俊さんは、二〇一六年に「いのちの木」で働きはじめた。「パソコンの仕事ならできる」と、名刺づくりをはじめたが、修正の指示が理解できない。「文字を『もうちょっと大きく』と言われる、その『もうちょっと』がわからないんです」。あとで職業適性検査を受けたときにわかったことだが、大出さんには脳性まひの特性の一つである「知覚障害」があった。「微妙なさじ加減ができない。『何ミリ



「五つのパン」設立からの職員である日向夏江さん

窓際の机は、大出俊さんの定位置だ

大きく』など具体的に指示されないと、わからないんです」。

日常のコミュニケーションには問題がないから、こうした「知覚障害」は、なかなか理解されない。「できるのにやらないんじゃないか、サボっているんじゃないか」と思われるのが怖くて、隠してしまう。大出さんの「目に見えない障害」は、肢体不自由という目に見える障害以上に、自分自身を苦しめていた。

「ミスしてほしい」の一言に救われる

あるとき大出さんは、横浜市の中小企業診断士・井手美由樹さんが立ち上げた事業を手伝うことになった。国や地方公共団体の助成金情報を収集しポータル化することを目的に、全国の助成金情報を収集・入力するのが、大出さんの仕事だ。フリーランスのプランナーとして活動していた鶴見紀子さんも、この事業に参画し、業務の可視化、効率化を担当することになった。

大出さん、最初から入力ミスや項目の抜けなどのミスが多かった。「この仕事、向いてないなって思いました」。岩永さんも同意見だった。しかし鶴見さんが打ち合わせの席で言ったのが「ミスをしてほしい」という言葉だった。「ミスを分析すると、解決の糸口が見つかる。マニュアルがよりよいものになる。だから、ミスの事例が欲しいんです。ミスの傾向がわかれば、それはその人の特性だと理解できる。だったら、それを生かすチームづくりをしていけばいいんです」と、鶴見さん。これには岩永さんも驚かされた。「障害があるから、社会に合わせなければいけない、と固定観念にとらわれていたのは、こちらの方でした」。「ミスをしてもいい」ことに気づいてから、大出さんもミスを隠さず報告するようになった。ミスを生かして、作業マニュアルも大きく改善していった。

「できる」が生みだす仕事ではなく「弱さ」が生みだす仕事を

大出さんの通勤を手伝っているのも、また障害者だ。ヘルパー歴一〇年の吉川進さんは、統合失調症を抱えながら、ホームヘルパー事業「クリスチャンワーカーステーション」で「ピアサポーター」として働いている。大出さんの送迎のほかに、精神に障害のある人を

左から、大出さん、井手美由樹さん、鶴見紀子さん、岩永さん。ミーティングの風景

訪問し、生活支援をしている。「ぼく自身が同じ経験をしているので、彼ら利用者のことはなんとなくわかるし、逆に彼らも、ぼくのことをわかってくれている感じがあります」。

「いのちの木」では、日々地域に暮らすさまざまな立場の人たちが「仕事」を通じてふれあい、支え合う光景が生まれている。これは「いのちの木」が、既存の福祉制度を活用せずに運営されていることも大きい。設立年こそ、横浜市からの助成金を受けたが、それ以降は基本的な運営費などについて助成金を受けることはないという。

「運営は大変。本当は、事業のことだけ考えたら、『仕事のできる人』を連れてくればいいんです。でも、わたしたちは、『弱い人たち』が立ち上がることが大事なのだと思っています」。

「できる」から生まれる仕事ではなく、「弱さ」から生まれる仕事を。制度の枠にとらわれない動きが、新しいつながりと仕事を生み出している。こうした「ヨコのつながり」をつくる動きには、横浜市も注目している。市は「オープンイノベーション推進本部」を立ち上げ、行政・NPO・企業・住民などが一体となって、地域の課題を解決していこうという動きを支援している。「いのちの木」は、そのモデルケースとなっており、行政関係者も、情報収集や相談をしに、岩永さんのもとを訪れるという。

今日も「いのちの木」では、さまざまな立場の人たちがふれあい、支え合いながら、自分たちらしい暮らしを送ろうとしている。

大出さんの出勤をサポートする吉川進さん